とある転生の原子操作（メルトオペレーション）

飯屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある転生の原子操作（メルトオペレーション）

【Ｎコード】
Ｎ２８６３Ｚ

【作者名】
飯屋

【あらすじ】
運命的な流れか、死とともに少年は『とある』世界に出現した。何故そこにいるのか、何故そうなったかはわからない状況でも少年は気楽に考える。そこで、予想外の『同類』と出会うとは思わずに・・・。そして、彼もまた物語に巻き込まれていく※転生＆原作介入ありです。主人公は強くなる？予定です。ヒロインは・・・どうしましょｗ皆さんの感想で決めましょうかねｗ

第一話：Ｄｅａｄ　ａｎｄ　Ａｌｉｖｅ（前書き）

初めまして！
ヒロイン不安定に定評のある飯屋と申します。
このたび、以前から挑戦してみたかった転生ものというのに挑戦してみました。
とはいっても作者の妄想がモトとなっておりますので突っ込みどころが多いかもしれませんが、転生ものＯＫという方、ぜひ読んでいただけたらと思っております！！

感想は参考にもしたいので出来たらくだ（ｒｙ

少し長いかもしれませんが、なにとぞよろしくお願いします。
そこまでシリアスにする気は・・・ある？かも。
気楽に読んでいただければいいかなぁと思います。

さぁて、ヒロインは誰にしましょかな。

第一話：Dead and Alive

ある日、少年は怪死した。

少年は病気を持っていたわけでもなく、急に発病したわけでもなく、また大きな怪我一つしていない。

にも関わらず、少年は糸の切れた人形のようにその場に崩れこんだ。

それもまるで心臓の部分だけ幽霊であったかのように、消滅して、だ。

だが、それは世界には無関係な出来事で今日も明日も明後日も明々後日も、時は続いていく。

歯車は回る。

あらゆる命をめぐり合わせ、運命を廻らせていく。

そして、死んだその少年の運命もまた・・・・・・・・。

■――■――■――■

この世界の科学、の総本山にして超能力者すらも開発できる学生の街、学園都市。

２３０万人の人口の大半が学生だが、手入れが行き届いていたり風車も多かったりクリーンな街である。

都市、と言うよりは国に近いこの学園都市のその四割方が能力者、つまりは超能力を使える人物だ。

さらにその中の第七学区という中等教育機関を主にしていて、多くの学生や教師がすんでいる学区。

その中のさらに中の路地裏を、一人の少年が歩いている。

「・・・（うーん・・・晩御飯、何にしようかな・・・）」

まるで上から染めたような真っ黒な髪に、整った顔立ち。

夏用の制服、つまりはカッターシャツを着ていて、腕には青色のリストバンドが巻かれていた。

そして彼は、スーパーなどで入れてもらえるポリエステル製の袋（中から大根や葱が顔を出している）を右手に持っていた。

（・・・転生して最初に買い物・・・気楽なのかな・・・）

少年はカッターシャツ以外の姿ならマフラー必ず着用している変わ

り者であるが、性格が荒々しいなどということはない。
一見すると何もない学生に見えなくもないのだが、実の所はとんでもない事情でここにいる。
ここに、という言葉は世界を示している。

――――そう、少年は本日転生を果たし、この世界に現出した存在なのだ。

（書庫（バンク）にもすでに俺の名前があった・・・ある程度なら銀行に俺の金もあった・・・。何か、まだしっくりこないな）

少年の名は、天王寺響（てんのうじひびき）。

彼は俗に言われる前世という世界で、怪死している。
理由はよくわからないが、運命的、つまりは定めのようなものだったと『何か』に教えられた。
『何か』という曖昧な表現をするのは、転生した際にあった記憶に転生について誰かに教えられた記憶があったからだ。
しかし、『何か』が誰か、まではわからない。
転生させられたのも、運命・・・・らしい。

神様が教えてくれたのかな、と気楽に響は思いつつ、路地裏から表の道路に出る。

暗いところから急に明るい場所に出たせいか、サンサンと降り注ぐ強い光が、響の目にしみる。

まず、彼は転生に気付くまで（というよりはそんな非・現実な出来事を認めるまで）かなり時間がかかった。

清掃ロボや超能力を見て、ようやく認めるに至ったわけだが、まだ受け止めきれていない様子だ。

どうすれば、どこに行けば、どこに住めばいいかわからないまま道に迷ったせいで（キョロキョロと怪しげだったから）警備員（アンチスキル）に少し調べられた。

そのときに、幸いにも苦労せずに書庫（バンク）に自分の名前と入居する予定の寮、学校を確認できた。

そこには転校生扱いとなっていて、明日から柵川中学校（三年生）に転校することになっていた。

（警備員（アンチスキル）の話から察するに連続虚空爆破（グラビトン）事件が目立ち始めたころ・・・・）

能力もまだ判明していない響にとって原作介入するかどうかは重大な問題だった。

（レベル低いと死ぬ・・・かもな）

自分という存在がいるだけでも、原作という本来のレールからは多少ずれる。

つまり、この世界に響が来た時点から多少の変化を帯びた平行世界（パラレルワールド）になっているであろうということだ。

（・・・はぁ、どうしたもんか・・・）

割と広い歩道を歩きながら、周囲の様子を確認する。

ドラム缶のような形状をした清掃路ロボが行きかっていたり、風車があったり、

道の隅では柄の悪い男がいたり、などと見るだけでも響にとって新鮮な空間であることが感じられる。

新しい生活が始まるんだな、とどうしても考えてしまう。

（えーっと・・・確か俺の寮は・・・柵川中学の近くだよな？）

学生寮に入るのは初めてで、やはりどこか緊張している自分がいることに気付く。

響自身、料理は得意であるため食べることには心配はない様子だ。

（・・・あ、・・・・・・・・・・・・・・・・・）

そこでふと響は重大なことに気付く。

（・・・部屋の鍵がなかった・・・・・）

―どうやって寮に入る気だったのだ？

自問自答しても答えは返ってこない。

とりあえず、鍵を取りにいくことにする。

転校してきたということになっているからには、学生寮も学校が関係してくる・・・はずだ。

（生徒たくさんいるだろうけど、先生に挨拶もしなきゃな）

道がわからないため、ポケットから薄い端末を取り出す。

最新式の向こうの世界で流行っていた薄型の携帯端末を左手で操作し、地図を表示する。

柵川中学校と入力し、場所を確認する。

端末の見た目は前居た世界と大差ないが、中身の性能は比べるまでもなかった。

地図も当然高性能で、今まで見づらかったものを使っていた響には十分すぎるくらいわかりやすかった。

まだ学校があるためか、あたりの学生は思ったよりも少ない。

きっちり整備された道を歩きながら、響は夏の暑さを体感する。
暑さは変わらないらしく、非常に飲み物が欲しくなる。
一応スーパーの袋にはドライアイスを布に包んで入れていたので食材はおそらく大丈夫だろう。
学校がある、といっても午前中授業だけのところが多いだろう。
ただいまの時刻は１２時過ぎ。
早めの学校ならもう学校は終わっているだろう。
道の途中で、人が集まっている場所を響は見つけた。
（ん・・・・？）
何か店でもあるのかと期待してそちらに視線を移したが、違った。
人が集まっているというのは間違っては居ないが、その人たちは響から見て個性的だった。
学園都市名物の不良、というやつである。
基本、ここは何か悪いことでもおきているのではないかと警戒するものだが響には個性的な人物、にしか見えていないらしい。
転生する前の世界では、ああいう人物は普通に暮らしているとあまり見かけないからというのもあるのだが、暑さにやられている響の脳内ではすぐには理解できなかったようだ。

少し近寄った響の目に、男たちに囲まれている少女の姿が映った。

（女の子？・・・！・・絡まれてるのか）

その少女には見覚えがあった。ふんわりとしたライトブラウンでセミショートの髪に、常盤台の制服。

湾内絹保（わんないきぬほ）。

白井黒子の級友で、水泳部員だった少女だ。

レベル３の水流操作系だったことも響は思い出す。

常盤台中学の授業が早めに終わったから、外に出て絡まれた・・といったあたりだろう。

彼女の性格なら、能力で攻撃して迎撃しないことも納得できる。

主要ではないにしろ原作のキャラの一人をここで見ることになるとは思わなかった。

（・・・・・）

ちなみに、響は喧嘩が強いわけではない。

しかもまだ能力が無い今、響はただの一般人に過ぎない。

（助けるか）

決断するのに、一秒もいらなかった。
普通に歩いて不良の集まりに近寄るだけでなく、湾内の正面、つまりは集まりの真ん中に躍り出る。

「大丈夫か？」

不良たちがすごい形相でにらんでくるが、響は動かなかった。
元々、響はこういう人間で、怖くともつらくとも、決めたことはやりとおす。
さらにいうならば、お人よしと呼ばれるものにもあてはまり、友達を作ることに苦労したことがないタイプだ。
そんな人間だからこそ、喧嘩に慣れていない。
少し涙ぐんでいる湾内は、驚いた様子で響を見る。

「え？あ、貴方様は？一体・・！？」

「俺か？俺の名前はて」

―天王寺響だ、と言おうとした時、不意に不良の一人が突っかかるようにして集団からこちらへ踏み出してきた。

「何だ？てめえ？いきなり現れたと思ったら随分調子乗った真似すんじゃねえか。なあ」

不良の中では結構普通な姿をした男だった。
髪を染めているわけでもなければ、チャラチャラしたものもあまりつけていない。
ただ、ガタイは周囲の不良よりはよく、強面だ。
声も低く、ドスのきいたものだった。
「俺は怒られるようなことはしてないと思うんだが」
響は湾内を守るように立つと、その男と正面からにらみ合う。
改めて男の迫力がこちらに伝わってきた。
周囲は囲まれているため、逃げることはままならない。

「・・・・アンタ普通にしてたら、多分周囲のやつよりはモテるぞ？」
「冷静だね。相当な能力者だから？」
「いや、能力はない（怖い・・コイツ何？駒場はもっと怖いのか？・・・）」
「まぁいいや。度胸だけは褒めといてやるから、さっさと帰れ、ガキ」

「その俺より年下に絡むお前らはロリコンだな」

「調子のんなよ！おい！」

男は声を荒げた瞬間、地面を蹴って突進するように響に殴りかかってきた。

喧嘩に慣れているのか、重そうな拳を響の顔面目掛けて振るう。

腕の太さからして、響がまともに相手に出来るとは思えない。

いやな予感がした響は首を思いっきり右に曲げる。

その真横を、拳が通り過ぎた。

「うおッ！？」

拳が通り過ぎた際の風圧が頬をなでる。

響が素早く重い一撃をかわせたのは偶然で、彼は心の中で安堵の息をもらしながらもすぐに後ろにいる湾内の手を掴んだ。

振り向かずに声だけで合図を送る。

「逃げるぞ！」

「は、はい！」

真横に居た不良の一人の顔に響はもう片方の手に持っていた買い物袋を投げつけ、その隙に集団の輪から抜け出す。

買い物袋には大根やジャガイモも入っていたので、結構な重さがあったと思われる。

とっさにしてはよく動けた、と自己評価しながらも湾内を連れて走る。

後から追いかけてきている集団を見ながら、逃げている響は徐々に追いつかれつつある状況に焦りながらも路地裏に入る。

薄暗く、埃が多い道を二人は駆け抜ける。

彼の頭の中にあったこの後のシュミレーションとしては、このまま曲がり角などを利用して逃げ切る、といったものだったが彼は忘れていた。

転生者である自分が、地理的な面において圧倒的なまでに不利だということを。

それこそ、先ほどのように端末で調べればいいのだが、その余裕もない。

「まだ走れるか！？」

「は、はい！」

湾内は水泳部だけあって、普通のお嬢様よりも体力があるらしい。

何度か角を曲がったが、あまり苦にせず走っている。

「ッ！」

ある角を曲がったところで、二人の足が急に止まった。

そこには、大きく、日をさえぎる様に壁があった。

それはビルの裏側にあたるらしく、塀のように乗り越えることも出来ない。

「行き止まり！？」

「そんな・・・」

他に道がないか探そうとした時だった。

「へッ、残念でしたぁ・・・」

「手間かけさせやがって、サンドバックぐらいにはなってくれるよなあ？」

――二人は追ってきた不良の集団に取り囲まれた。

「ッ・・・・（不味い・・）」

ジリジリと近寄ってくる集団を前に、響は湾内を自分の後ろに立たせ、警戒する。

先ほどのようなアクションはもう出来ない。

転生早々かよ、と響は呆れたようにため息をつく。

どうしようかな、と次の行動を考えてたその時、響から見て奥、不良たちの集団の後方にいた不良の一人が力なく崩れた。

「おい！？」

「「！！？」」

急なことに驚きを隠せない一人が、音もなく地面にひっくりかえった。

不良たちの意識が、後方に向けられる。

（・・・アレって・・・もしかして）

響は、原作知識があるため、この現象を知っている。

「・・・お怪我はありませんですの！？」

「・・あ、ああ・・・」

ザワザワとあたりを警戒する不良の前、つまりは響と湾内の前にツインテールの少女が現れる。

響も、原作人物が目の前に現れたことに驚愕していた。

白井黒子。

学園都市に数少ない空間移動（テレポーター）能力者の一人の上、自称御坂美琴の露払にして治安維持機関風紀委員（ジャッジメント）に所属している変態大能力（レベル4）者の少女。

何も無かった空間に突然現れ、それを普通としている少女に、数秒送れて不良が気付く。

そんな不良たちに向き直り、白井は腕に巻かれた緑色を主とした風紀委員（ジャッジメント）の腕章を見せ付ける。

「風紀委員（ジャッジメント）、ですの！」

◆―◆―◆

「助かった、サンキューな（・・・予想以上に・・・・強っ）」

風紀委員（ジャッジメント）第一七七支部まで（事情聴取のために）移動した響は白井を前に笑顔で礼を告げる。

風紀委員（ジャッジメント）第一七七支部の中身は、学生が居座るような空間というよりは、病院や会社といった事務室的なつくりで、そんな部屋には山のように資料が置かれている。

また、今でも情報が届いてきているのか、誰も使っていないパソコンもずっと作動中だった。

慣れるまでは息がつまりそう、と響は感じた。

味気ない机や、椅子が多い中、テーブルを挟んで響と白井はソファに座って向かい合わせになっている。

「申し送れましたが、わたくしは白井黒子と申しますの。
天王寺さん・・・でしたっけ？・・・貴方のおかげで、湾内さんが無事でしたの。感謝いたしますわ」

「いや、俺は何もしてないさ。結局、怖い目にあわしちまった」

「いえ、彼女も感謝していましたわよ？友人としてお礼でもしたいのですが・・・」

「そう言ってもらえると助かる。俺、ここにきたばかりだからさ。自分で言いたかねえけどまだ右も左もわからないんだ」

「転校生ですの？こんな時期に・・・どこの学校へ？」

「柵川中学校だ」

響の言葉に、同じ部屋でずっとパソコンに向かい合っていた少女は何かに気がついた様子で椅子から立ち上がり、二人のいるほうへ歩いてきた。

頭に花飾りがあり、まだ顔に幼さを残したかわいらしい少女は二人の近くまでくると二人の話に乗る形で入ってくる。

「私も同じ柵川中学です。あっ！わ、私は初春飾利っていいます。白井さんと同じ、風紀委員（ジャッジメント）です！」

（！）

初春飾利。

ある意味、これほど他と見間違える人物はいないかもしれないくらい、頭の上に乗っけている花飾りは目立っていて、あおの花飾りは何故だか無性にむしりとりたくなるものだった。

造花であるらしいのだが、よく出来ていることは頷けた。

「俺は天王寺響、白井も天王寺じゃ長いだろうから響でいい」

「そうですか～では響さんと呼ばせてもらいますね？そう言えば、どこから転校してきたんですか？」

「（世界の）外からだ」

「なるほど（学園都市の外から、とは）また珍しいですね～。大丈夫ですよ！私たちが出来る限り力になりますから！！困った時はいつでも頼ってください！！」

初春はあまり厚みのない胸を張り、えへん、と自身満々で言い切る初春。

「そこまでは頼れませんの」

「し、白井さん！！何言ってるんですか！私だって問題の一つや二つ！パパッと解決しちゃいますよ！っていうかしてみせますよ！」

二人のやり取りについ口元が緩む。

二人はそのまま激しい？討論にまで発展し、響を置いてけぼりにしていた。

暇になった響は、ソファにもたれかかるように後に倒れようとする。
その時、不意に声をかけられる。

「――――随分と女に囲まれているわね」

「！？」

少し大人びてしっかりとした口調に、響は驚いた。
ビクッ、と肩を震わせて前のめりの姿勢になり、目の前のテーブルに額をぶつける。
その衝撃で少しテーブルがゆれ、テーブルの上においてあったコップが倒れかけたが気にしない。
だが、響に声をかけた人物は響の横に出ると改めて口を開く。

「お久しぶり、とでも言うべきかしら？響」

声の主は、茶色く、クセ毛のない綺麗なロングに幼さと大人びた二つの感じを漂わせる顔立ちでどことなく優雅さを感じさせる雰囲気の少女だった。

・・・――――誰だ――？

（いや、違う・・・俺はコイツを知っている）

響の脳が、この少女について考えようとした瞬間から痛みを発しだした。

とくに騒ぐほどでもないが、脳内の血液が重くなった気もした。

（何だ？頭の奥にフィルターが出来た感じ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・）

「・・・やっぱりこうなったわね。・・・お前に残念な脳に簡単に説明するなら『私たちのような存在』は前いた場所の人間に忘れ去られるものなの。理屈云々は私もわからないけど、何故だか私はそういう説明が頭にすり込まれてる・・・。じゃあ今度は私に関してのヒントよ。・・・貴方の身近で、二年前に怪死した人間の名前は？今の、こっちにきた貴方なら思い出せるはずよ」

「『私たちのような』？・・・存在？怪死？・・・・・・・お前、まさか『ｚｍｄｇ者』！？ッ！！？（言葉にノイズが！？）」

「いいから考えてなさい」

少女の言葉に、困惑しながらも必死に記憶を辿る響。

――怪死？二年前？

（・・・・ッ！・・・・・・・・・外傷もないし病気でもないのに死んだやつを、知ってる？・・・・・・・まさかッ）

ピキィンッ！！と頭の中で何かが砕けたような気がした。

それを境に、その人物に関しての、少女に関しての記憶が文字通り響の頭になだれ込む。

痛みは治まったがあまりにも情報が多く脳に負荷がかかったためか、目眩がした。

「・・・・・橘（たちばな）藍（あい）」

そう、前世で、転生前の世界での幼馴染の少女の名を響はようやく思い出せた。

二年前、糸の切れた人形のように倒れ、医者や家族の前で文字通り脳が跡形もなく消滅して死んだとされる少女でプライドが高かったのは変わっていないが、性格は響の知っているものとは違った。

名前を呼ばれた藍はニヤリと怪しげな笑みを浮かべると、響のそばにより、ソファに腰を下ろす。

「ご名答。お前にしてはよく考えたわ」

「性格は変わりすぎだろ！？何だその女王様キャラ・・というより魔王キャラ」

「風紀委員（ジャッジメント）よ・・・そっちは何？ここにきて早々女の子に絡んで・・・。一級フラグ建築士にでもなるつもり？」

「なんでさ。こっちは最初から不幸な目にあっただけだってのに・・・」

「・・・最初の一言が一級フラグ建築士ね（上条さんとは違う人だけど・・・）・・・・・はぁ・・・・」

「？」

呆れる藍を見て、首を傾げる響。

そこに論争に負け、精神がボロボロになった状態の初春がやってくる。

「響さぁ～ん・・・白井さんひどいですよぉ～・・・・。
っていうか響さんって橘先輩と知り合いだったんですね！何話してたか知りませんけど、仲よさげでしたし」

「切り替わり早ッ！」

初春は『とりあえず、ちょっと資料まとめてきますね～』などと言いながらパソコンのほうに向かった。

横にいた藍も、その言葉につられた様にソファから立ち上がり別の机に座り、パソコンと向き合う。

白井は何故かいない。

一人することもなく待たされることになった響は、両腕を頭の後ろで組んでソファに寝転ぶ。

簡易な見た目に反して、全体的にフカフカだった。

（ん？そもそも、俺、何しようとしてたんだ・・・？）

いまさらながらクーラーのきいているこの部屋で静かに考える。

確か、湾内を助けようとして・・・。

・・・その前は。

・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・あ゛・・・・。

しばらく続く沈黙の間、ボーッとしていた響はあることを思い出す。

（・・・寮に向かってたんだった！！っていうか鍵！）

◆―◆―◆

「私がついてきてやったことを光栄に思えて？」

「ローラ＝スチュワートみたいな口調になってやがる・・・。まあ、同じような境遇がいるのは助かるけど・・・」

「よろしい。お前は素直でよくてよ」

うれしくないなあ、と呟きつつ響は歩きながら疲れたように頭に手をやった。

ここは柵川中学の廊下で、響と藍の二人は職員室に向かって足を進めていた。

流石学園都市といいたいくらい、前世の学校よりは綺麗な、というよりも清楚なものだった。

藍の制服と態度と話から、というより説明をうけてのものだが藍もこの学校の生徒らしい。

この学校も先ほど授業を終えたようで

響の横にいる彼女が廊下で歩いていくたびにすれ違った生徒はこちらに注目していた。

性格上、目立っても仕方ないと響は思ってしまう。

（・・・それにしても、コイツが風紀委員（ジャッジメント）かぁ・・）

・・・ものすごく不安だ。

「今余計なことを考えたわね？」

「いや、違います。ってそれよりもさ一つ聞いてもいいか？」

「素直なので許可するわ」

ここで、響は最初に考えていた悩みの元を尋ねることにする。

学園都市に彼女が先に来ていて、しかも風紀委員（ジャッジメント）にまでなっていたということはあらかじめ何かを持っていることぐらいは簡単に想像が出来たからだ。

「お前の能力って何？」

「そうね。言ってなかった？大能力者（レベル4）の発火能力（パイロキネシス）よ。実質超能力者（レベル5）ぐらいの力は持っているのだけど、脳ある鷹は爪隠す・・コネで隠させて貰ったわ」

怪しげな笑みのまま得意げにそう言い放つ藍。

いちいち発言のたびに怪しげなことを言う藍に響は疲れたようにため息をつく。

「お前に炎、か。逆らったら跡形もなくなりそうだ。っていうか似合わない似合わない」

「ほぅ、私は『紅蓮の女王』というイメージ的にぴったり思っているわ」

「その某少年雑誌の漫画ネタ、何人に通じるんだ・・・。それでもイメージとは合わないぞ」

「まあ、フレデリカよりは私のほうがふくらみがあってよ」

「腹に、か？」

「胸に、よ」

言葉とともに藍の拳が響の顔面に横から入る。

ゴン、と軽い仕草ながらも痛い一撃だった。

「ぶふぉッ！？暴力はないだろ」

「気のせいよ」

さらりと否定してスタスタと先に進む藍。

絶対風紀委員（ジャッジメント）に向いていないだろコイツ、と心の中で突っ込みながら響もそれを追いかける。

疲れた様子でも響はこれから通う学校を見渡しながら進む。

慣れる為に校舎内を周ってから職員室に向かおうという、何とも藍の優しい（藍曰く）優しい提案だった。

こうしてしばらく校舎内を見て回った響は、職員室の前で立ち止まった。

基本的に生徒が入ることを少し意識してしまう教師の聖域の扉を、藍は自ら家のような気軽さで開いた。

そして振り返りつつ、響に指で職員室の中を指差しながら言う。

「とりあえず、先生に挨拶ぐらいはすませてきなさい。私は先に帰るわ」

「・・・・・・・・・・・・そうさせていただきます」

この後、無事に鍵を手に入れた少年は不良に絡まれたり、落ちていたバナナの皮をふんで階段から転げ落ちたり、買った肉まんの中に具が入っていなかったりなどとこの世界からの様々な祝福を受けて、

寮にたどりつくことになる。

第一話：Ｄｅａｄ　ａｎｄ　Ａｌｉｖｅ（後書き）

バーロー！主人公気楽過ぎるだろｗｗとまあこれは自分の感想です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2863z/

とある転生の原子操作（メルトオペレーション）

2011年12月11日17時49分発行